

2021年1月17日(日)／説教者：國分美生

説教：「ヒトはなぜ歌うのか」

聖書：詩編42:2～12

詩編 42 編は、私の魂は神を求めて飢え渴いています、という情熱的な祈り求めの歌です。作者は苦悩の思いを神の御前に吐き出します。しかし嘆きでは終わらずに「神を待ち望め、私はなお告白しよう「御顔こそ私の救い」と。」と、苦しみから讃美の声へと変化していきます。詩編は本来、様々な楽器が用いられメロディを伴っていました。当時の人たちは祈りと、感謝と信頼の思いを歌うことによって表していました。

体も心も、言葉にできないほど苦し追い詰められている時、祈る言葉さえも失い沈黙してしまふ。でもそんな時、絞り出されるように歌が口をついて出てくる。そのような経験をすることがあります。苦しみを神の前に吐露すること、祈り求めること、救いを信じ讃美すること、それらは神への信頼という枠組みの中でひとつであることをキリスト者は信じ、礼拝において詩編を用いてきました。

今も讃美の詩や歌はたくさん生まれています。代表的なものがアメリカで生まれた黒人霊歌・ゴスペルです。アフリカの地から無理やり連れてこられ、奴隷として暴力と辱めを受けながら働かされていた人々は、自分たちの言語と、信じていた宗教までも取り上げられましたが、その中からキリスト教を信じる人たちも出てきました。その人たちによって、讃美歌と自分たちのアイデンティティであるアフリカの音楽とが融合されたものが黒人霊歌です。人々は過酷な労働の合間や礼拝の中で、生み出されたこの新しい讃美歌を歌うことでどれだけ励まされたことでしょうか。福音は私たちのためにこそある、という救いの希望が黒人霊歌からはあふれています。

福音書からわかるように、イエスも信仰生活の基準として詩編を口ずさんでいました。嘆きと訴えがつづられた詩編をイエスも読み、そしてそのような人生を実際に送られたこと、人間の苦しみの底辺を経験されたことを福音書から知ることができます。困難にあって孤独の中で祈るとき、また教会の仲間たちと共に祈るとき、私たちは一人ではなく、イエス・キリストが共におられます。

私たちの今この時の苦しみに、この瞬間主が寄り添ってくださっているからこそ、この沖縄…私たちの生きているこの現場から、自分たちの言葉で、主の恵みと希望を歌いたい気持ちに駆られます。祈りと願いと感謝を込めた歌を歌う、そのことがこの社会での私たちの証しとなっていくでしょう。(國分美生)